

## すべてのいのちを守るため

名古屋教区司教 ミカエル 松浦 悟郎

いま、わたしたち名古屋教区では、各ブロック、小教区で心を合わせて平和を祈っています。39年前、日本の教会が、教皇ヨハネパウロ二世の「平和メッセージ」にこたえて始めた平和旬間を、今年は「すべてのいのちを守るため」という教皇フランシスコ訪日テーマで迎えています。

今年はコロナ禍によって、この数ヶ月で世界も日本も劇的に変わりました。生活のあり方だけではなく、政治、経済から生活習慣、人との関わり方、価値観まで大きな影響を受けています。その中で新しい気づきもありますが、逆に失ったもの、見えなくなってしまうこともいろいろあると思います。

さて、今年は戦後75年の年にあたります。当時の人々は、自由が少しずつ奪われていく中で戦争へと向かわされ、気がついた時には、もはや抵抗できない強い力で、国民あげての戦争へと駆り立てられていったのです。今を生きるわたしたちは、過ちを繰り返さないためにも、このことを決して忘れてはならないのです。

あらゆるいのちを壊す戦争は、突然やってくるものではありません。生きた関係が壊れ始め、自由が少しずつ制限され、差別が行われ、いわゆる「敵国」がすりこまれ、過去と向き合わなくなり、法律が変わり、軍備が増強されていく。そのように、じわじわと迫ってくるものであり、その1つひとつを「仕方ない」と見過ごしていくうちに、止めることができない力で巻き込まれていくのです。人々は、つねに不安や敵意を駆り立てていくような刺激的な言葉に動かされてしまいます。こうして、いったん戦争が始まれば止めることは難しく、人間だけでなく、あらゆる生物、環境も破壊されていきます。戦争はさらに暴力の文化を生み出し、それが社会のあり方や、1人ひとりの人間性にまで深く影響を及ぼしていくのです。

このような状態にならないように、わたしたちはまず、神の声に耳を傾けなくてはなりません。今日の第1朗読（列王 19:9a,11-13a）で、エリアは自分を殺そうとする王妃イザベルから逃げて、洞窟に隠れます。エリアは神の声を聞こうと外に出ますが、激しい風、地震、火の中に神はいなかったのです。そして、そのあとに静かにささやく声が聞こえたのでした。今、コロナ感染への不安や近隣諸国との緊張関係であっても、そのような現象が自分の心の中で騒がしい声となって駆けめぐっているなら、そのなかにある神の声は聞こえないのです。では、どのようにしたら神の声が聞こえるのでしょうか。

神の声を聞くというのは、具体的には、祈りの中でキリストの思いに触れながら、いまの現実の中で、特に弱い立場に置かれ、苦しんでいる人たちの声に耳を傾けることです。キリストは、彼らのうめきをご自分のものとされ、十字架の上で「渴く」と声をあげたからです。

弱い立場の人とは、いま生きている人々はもちろんのこと、過去の戦争であっても人間の尊厳が踏みにじられ無念の思いで亡くなった人々も含まれており、そのような人々の声なき声にも耳を傾けるのです。その意味で、戦後75年というこの年は、歴史と真摯に向き合うための良い機会となります。

このような思いをもって、暗闇の洞窟から出て神の前に立つなら、わたしたちはきっと「ささやくような神の声」を聞くことができるでしょう。

平和をつくる道は決して簡単ではありません。欲望渦巻く現実の中で起こる騒がしい声が、時に平和を守ろうとする人を排斥していくからです。そんな逆風が吹いたとき、その中をわたしたちのところに來てくださるイエスがいて、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」（マタイ 14:27）と励ましてくださっているのです。

こうした信仰に支えられて、ともに平和を願い、祈り、行動してまいりましょう。